



Title	東北帝国大学農科大学大学予科及び高等学校における入学者選抜試験制度の変遷（2）
Author(s)	廣瀬, 公彦
Citation	北海道大学大学文書館年報, 19, 22-48
Issue Date	2024-03-29
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92229
Type	bulletin (article)
File Information	19_02.pdf



[Instructions for use](#)

< 研究ノート >

東北帝国大学農科大学大学予科及び高等学校における入学者選抜試験制度の変遷 (2)

廣瀬 公彦

はじめに

1907年6月22日公布の「東北帝国大学ニ関スル件」¹⁾(勅令第236号)により、札幌農学校は同年9月1日をもって東北帝国大学農科大学となった(以下、「東北農大」と略す)。「東北帝国大学農科大学官制」²⁾(勅令第237号、1907年6月22日)は、農科大学に「大学予科」を附属することを定めた。東北帝国大学農科大学大学予科(以下、「東北農大予科」と略す)は、入学資格を中学校卒業者とする修業年限3年の課程で、卒業者は東北帝国大学農科大学への第一次入学資格を得た³⁾。

東北農大予科は設置以前から、入学資格、修業年限、帝国大学への進入経路にあたるという諸点において、高等学校との類似が指摘されていた。以下に6例を掲げる。

- ①札幌帝国大学予科創設旨趣〔中略〕乃チ札幌農学校今日ノ予修科ヲ以テ高等学校ノ設備トナシ当分札幌帝国大学ニ附属セシムルモノトス且ツ其学科ハ現今ノ各地高等学校ニ於ケル第二部ニ属スル科程ト同一ノ教授ヲ施サント欲ス

(「札幌帝国大学設立案」1899年頃、札幌市中央図書館所蔵)

- ②従来ノ予備科即チ是迄中学卒業者ヲ收容シテ、二ヶ年ノ課程ヲ修メシメタルモノヲ、来学年ヨリ三ヶ年に延長シテ、大学予科トナスと同時に、本科ノ四ヶ年ヲ三ヶ年に改メ、以テ他ノ高等学校および大学と対立セシめん考ナリ

(『教育時論』第782号、1907年1月、時事彙報「札幌大学の施設」)

- ③大学予科ハ高等学校大学予科第二部ト其程度ヲ同シクシ修業年限ハ三箇年トナルヘシ

(1907年5月13日付『官報』、札幌農学校「生徒募集」広告)

- ④尚当大学ノ特色トすべきハ〔中略〕高等学校第二部、高等農林学農科大学ノ三制度ヲ包有セリ

(『教育時論』第800号、1907年7月5日、時事彙報「札幌農大」)

- ⑤本科ハ東京農科大学ノ本科ニ予科ハ各高等学校ノ第二部に該当シ〔後略〕

(『全国学校案内 明治四十二年』内外出版協会、1909年1月)

- ⑥大学予科と実科——大学予科は卒業後大学に進むものを入学せしむ。つまり他の高等学校と同じものと見てよい。

(『中学世界』第12巻第4号、1909年3月、「官立諸学校入学志望者要覧」)

一方、入学者選抜試験の実施過程は、両者で異なっていた。高等学校では、文部省の定

める規程に則り、文部省の開催する高等学校長会議において諮問および決議がなされ、文部省告示にて発表された要項によって、入学試験を実施した。東北農大予科は、文部省の規程や告示の対象ではなく、東北農大が掲載する『官報』『生徒募集』広告にて示した実施要項により、入学試験を実施した。ただし、1908年以降の高等学校長会議に東北農大予科の出席が確認でき、高等学校と無関係に試験を実施してはいないことがうかがわれた。

そこで、1907年～1917年の入学者選抜試験について、高等学校と東北農大予科と比較しながら変遷をたどることとし、前稿⁴⁾では1907年～1911年をとりあつかった。本稿では1912年～1917年についてとりあげ、末尾において1907年～1917年を概括することとする。

1. 高等学校と東北帝国大学農科大学大学予科の1912年入学者選抜試験

1912年に実施した高等学校および東北農大予科の入学者選抜試験について考察するにあたり、両者の試験日程の概略を表1に示す。

表1 高等学校および東北帝国大学農科大学大学予科の1912年入学者選抜試験の日程

月	日	高等学校	日	東北帝国大学農科大学大学予科
4月	18日	高等学校長会議〔～29日〕	20日	『官報』『生徒募集』広告掲載
	27日	「本年各高等学校ニ入学セシムヘキ生徒数及選抜試験ニ関スル事項」(文部省告示第141号)		
	27日	『官報』『生徒募集』広告掲載		
5月		25日	出願期限〔無試験検定希望者〕	
6月	15日	出願期限	14日	出願期限
			21日	入学試験実施
7月	11日	入学試験実施〔～14日〕	13日	『官報』『入学許可』掲載
	20日	『官報』『入学許可』掲載〔二高〕 〔以降、一高・三高～八高が順次掲載〕		

典拠)『文部省年報』、『官報』、『朝日新聞』、『読売新聞』、『教育研究』より作成。

1-1. 1912年開催の高等学校長会議の協議内容

1912年4月18日～29日の日程で、文部省は高等学校長会議を開催した。6件の諮問事項のうち入学者選抜試験に関わるものは、「本年各高等学校に入学せしむべき生徒数、選抜試験の期日、学科目及び其問題等に関する意見」と「無試験入学検定規程存否に関する意見」の2項目があった⁵⁾。

会議の決議書は確認できていないが、新聞記事から協議内容の一部を伺うことができる。

前者については、「高等中学校令」(勅令第217号、1911年7月31日)施行の見通しがいまだ立たない影響で定員の決定に時間を要し⁶⁾、4月23日に募集定員と試験期日(7月11

日～15日)を決定した⁷⁾。

後者については、各高等学校長が無試験入学検定規程による入学者の入学後の成績を持ち寄り、検討した。競争率の高い学校(一高)と学部(第三部)において成績不良で、競争率の低いその他の学校と学部では優良とも不良ともいえず、素行も加味すると総じて目前の試験成績に拘泥しすぎる傾向があると評している。無試験入学制度は存置すると結論したが、中学校において過度な勉強を避けるよう指導が必要と注意が添えられた⁸⁾。

1-2. 高等学校の1912年入学者選抜試験

4月27日、文部省は「本年各高等学校ニ入学セシムヘキ生徒数及選抜試験ニ関スル事項」⁹⁾(文部省告示第141号、1912年4月27日)にて、募集人員、試験科目、試験期日を発表した。

試験科目は、第一部～第三部に共通して国語及漢文、外国語の2科目があり、他に第一部には数学(代数、幾何)、歴史及地理を、第二部・第三部には数学(代数、幾何、三角)、物理を課した。

試験期日は7月11日～14日である。

同4月27日、第一高等学校～第八高等学校は連名で『官報』に「生徒募集」広告を掲載し、出願期限(6月15日)と試験日割を掲示した¹⁰⁾。

なお、文部省告示と「生徒募集」広告の示す試験期日(7月11日～14日)は、前出の『読売新聞』記事の内容(7月11日～15日)と1日の差異がある。前年は数学の代数(3時間)と幾何(2時間)を別日に実施したが、当年は代数・幾何(3時間30分)として同一日に実施した。23日の会議決定時点では前年同様の日程の予定であったが、告示発表までに実施期間を1日短縮するよう変更した可能性がある。以降、1917年まで、試験日程は4日間である。

7月20日、文部省は『官報』に第二高等学校の入学許可者を掲載した。7月24日に第七高等学校造士館、7月26日に第四高等学校、7月27日に第八高等学校、7月30日に第三・第五・第六高等学校、8月3日に第一高等学校の入学許可者が『官報』に掲載された¹¹⁾。10月22日にかけて、『官報』には各校の入学取消および追加の入学許可の記事が13回掲載された。

1-3. 東北帝国大学農科大学大学予科の1912年入学者選抜試験

(1) 東北帝国大学農科大学大学予科の1912年入学者選抜試験の実施内容

4月18日～29日に開催された高等学校長会議には、東北農大予科主任の渡辺又次郎が出席した。渡辺の履歴資料には「¹²⁾〔明治四十五年〕四月十一日 高等学校長会議参列ノ為上京ヲ命ス 農科大学」¹²⁾とある。

4月20日、東北農大は『官報』「生徒募集」広告記事にて、出願期限(6月14日、無試験検定志願者は5月25日)、試験期日(6月21日より)、試験科目(国語及漢文、英語、数学

〔代数、幾何、三角〕、物理)を掲載した¹³⁾。前年と比して、数学の三角が増え、歴史及地理と化学が物理に置き換わっており、高等学校第二部・第三部の変化と同じである。『官報』掲載日は高等学校長会議3日目であるが、日程と科目は、1909年は第3日¹⁴⁾、1910年は初日¹⁵⁾、1911年は第3日¹⁶⁾に決定されており、会議の初めに協議されたとみられる。東北農大の試験期日や科目は、高等学校長会議の協議を踏まえ、高等学校第二部・第三部に準拠したと推測することが可能であろう。

5月8日、入学志願者撰抜試験委員会が開催された¹⁷⁾。出席者は、南鷹次郎(委員長、農科大学教授、農学実科主任)、渡辺又次郎(大学予科教授、同科主任)、小出房吉(農科大学教授、林学実科主任)、坂岡末太郎(土木工学科教授、同科主任)、藤田経信(水産学科教授、同科主任)、森本厚吉(農科大学助教授、教務部主任)、吹田順助(大学予科教授、同科独語主任)、星野勇三(農科大学教授)、青葉萬六(大学予科教授、同科第三年学級主任)、三田村孝吉(大学予科教授、同科数学主任)、玄地誠輔(大学予科教授)、鈴木庄治郎(大学予科教授)、木村勇(大学予科教授)、武原熊吉(大学予科教授)、高杉榮次郎(大学予科教授、同科英語主任)、有島武郎(大学予科教授、同科第二年学級主任)、小川忠之助(庶務課長、官報報告主任、書記)の17名である。

会議では、受検者心得、監督者心得、試験日割、試験問題の細目と配点を制定した。試験問題の細目と配点の項を以下に抜萃する。

四、選抜試験小科目及其採点標準ヲ定ムルノ件

- | | | |
|--------------|----------------------|-------------------|
| 一、国語及漢文 式〇〇点 | 1 国文解釈一問四〇点 | 2 漢文解釈一問四〇点 |
| | 3 書取一問四〇点 | 4 作文一問五〇点(文語体普通文) |
| | 5 文法二問三〇点(各問十五点宛) | |
| 二、英語 二〇〇点 | 1 解釈四問八〇点(各問二〇点宛) | |
| | 2 英語四問八〇点(各問二〇点宛) | 3 書取一題四〇点 |
| 三、数学 二〇〇点 | 1 代数四問一〇〇点(各問二十五点) | |
| | 2 幾何二問五〇点各問二十五点立体ヲ除ク | |
| | 3 三角二問五〇点(各問二五点) | |
| 四、物理 一〇〇点 | 四問(各問二五点) | |

五、小科目ハ官報ニ発表シタルモノ、外ハ全部秘密ニスルコト

各科目の細目・設問数・配点を決定し、細目は『官報』に掲載した「数学(代数、幾何、三角)」を除いて公表しないこととした。また、試験実施後、7月8日午前8時までには点数記入用紙を教務部に提出し、7月8日・9日に成績調査をおこない、直ちに試験委員会を開催して成績を決定することを定めた。

7月8日、予告通り入学志願者撰抜試験委員会が開催された¹⁸⁾。出席者は前回と同様である。決議事項のうち、大学予科に関わる部分を抜き出す。

- 一、各学科ノ点数満点ノ四分ノ一ニ達セザルモノハ入学ヲ許サルコト、ス
- 一、入学許可者ヲ左ノ通り定ム(各学科主任ノ撰定ニ準拠ス)

大学予科百名 物理十五点ノモノ一名アルモ数学ニ於テ良好ナルヲ以テ差支ナキ
許可ナスコト、ス〔中略〕
物理学ハ例年試験問題トナラサリシニ本年突然問題トナリタルガ
故ニ受検者ニ於テ不備ノ点ナキニアラサルヲ以テ数学ニ於テ秀タル
モノハ特ニ採用セリ

各学科目の最小限点数は、前年に同じく1910年度高等学校長会議の決議事項に従っている。ただし、物理が100点満点中15点の者について、物理を課したことは例年の傾向から外れていた事情に鑑み、数学の成績によって補うことを認める特例措置をとっている。ただし、物理は1907年～1910年にも課されており、設問数・配点・時間も大きな差はない。前年に課されていないことを指したものが、不分明である。

7月13日、文部省は『官報』に東北農大予科の入学許可者を掲載した¹⁹⁾。

(2) 東北帝国大学農科大学大学予科の1912年入学者選抜試験受験者の体験記

東北農大予科の1912年入学試験の受験体験記として、表2のとおり2点を確認している。

表2 1912年の東北帝国大学農科大学大学予科受験者の体験記

著者名	記事名	掲載誌名	出版年月
板垣信之	その頃の学徒たち 強情な弘前の人	『札幌同窓会誌』第2号	1967年12月
小林直材	尽きぬ思い出と感謝	『札幌同窓会誌』第4号	1970年3月

体験記は志望動機に関わるもの1件(小林)と合格通知に関わるもの1件(板垣)である。

小林直材は、札幌農学校が北1条～北2条にあった頃から親しんでおり、その頃から入学を志望していたという²⁰⁾。板垣信之は、入学許可者を掲載した『官報』で自らの氏名が冒頭にあって驚いたが、成績順ではなくイロハ順であったと述べている²¹⁾。

1-4. 小結

高等学校の1912年入学試験について、高等学校長会議では無試験検定入学の存置を決めた。試験科目は文部省告示によって示されたが、前年は第一部～第三部共通であったところ、第一部と第二部・第三部で科目に差を設けた。

東北農大予科は、予科主任の渡辺又次郎が高等学校長会議に出席した。決議内容は明らかでないが、前年同様に試験日程を高等学校に先んじることが決議されたものと推測される。

試験科目は、4月20日付『官報』「生徒募集」広告に掲載された。科目は高等学校の第二部・第三部と同様である。掲載日は高等学校長会議第3日にあたるが、日程や科目は会

議の初めに協議されることが通例であり、1912年についても会議の決議を踏まえて高等学校第二部に準拠したとみなされる。

入学志願者撰抜試験委員会では、5月8日に試験科目の細目や配点を決議した。細目について、『官報』に掲載した内容以外を公表しない旨が記載されている。7月8日は入学許可者の決定がおこなわれ、前年と同様に満点の4分の1を入学許可の最小限点数としているが、物理の得点不足について数学をもって補う措置をとっている。1910年の高等学校長会議における決議事項の実践を引き継ぎつつ、より柔軟な対応をとるように変化がみられる。

2. 高等学校と東北帝国大学農科大学大学予科の1913年入学者選抜試験

1913年に実施した高等学校および東北農大予科の入学者選抜試験について考察するにあたり、両者の試験日程の概略を表3に示す。

表3 高等学校および東北帝国大学農科大学大学予科の1913年入学者選抜試験の日程

月	日	高等学校	日	東北帝国大学農科大学大学予科
5月	6日	高等学校長会議〔5日間〕	8日	『官報』「生徒募集」広告掲載
	8日	「本年各高等学校ニ入学セシムヘキ生徒数及選抜試験ニ関スル事項」(文部省告示第129号)	31日	出願期限〔無試験検定希望者〕
	8日	『官報』「生徒募集」広告掲載		
6月	15日	出願期限	17日	出願期限
			23日	入学試験実施
7月	11日	入学試験実施〔～14日〕	11日	『官報』「入学許可」掲載
	22日	『官報』「入学許可」掲載〔二高〔以降、一高・三高～八高が順次掲載〕〕		

典拠)『文部省年報』、『官報』、『朝日新聞』、『読売新聞』より作成。

2-1. 1913年開催の高等学校長会議における決議

1913年5月6日より5日間の日程で、文部省は高等学校長会議を開催した²²⁾。高等学校8校の校長、福原鐮二郎文部次官、松浦鎮次郎専門学務局長が出席した²³⁾。東北農大の出席は確認できない。

「大正二年五月高等学校長会議決議書」²⁴⁾によれば、試験の日程、試験科目、無試験検定等について決議がなされた。

試験日程については、東北農大予科を他の各高等学校に先行させ、第一～第八高等学校は同時に施行することとなった。高等学校の日程は、出願期限が6月15日、試験期日が7月11日～14日とある。東北農大予科の具体的な日程については記載がない。

試験科目は前年と同様に、国語及漢文と外国語を第一部～第三部に共通とし、第一部に

は数学（代数、幾何平面）と歴史及地理、第二部・第三部には数学（代数、幾何平面、三角法）と物理を課した。なお、数学の代数と幾何平面については、「一部ハ二部、三部ト問題ヲ異ニスルコト」とされ、設問数や配点も差異が設けられた。

無試験検定については、「生徒募集」広告の掲載内容を決議した中に、以下の記述がある。

入学者無試験検定ノ件ハ本年ハ従来ノ通トシ明年以後ハ学校ニ依リ或ハ従来ノ通施行スルモノモアルヘク又或部ニ限り之ヲ施行シ又ハ全ク之ヲ施行セサルモノモアルヘク各学校随意トスルコト

前年の高等学校長会議では、学校や部の競争率の高低によって無試験検定入学者の入学後の成績に差があるという検討結果を踏まえつつも存置すると結論していた。当年は、なお無試験検定を存置するものの、翌年以降は各高等学校の判断に委ねることとなった。

2-2. 高等学校の1913年入学者選抜試験

5月8日、文部省は「本年各高等学校ニ入学セシムヘキ生徒数及選抜試験ニ関スル事項」²⁵⁾（文部省告示第129号、1913年5月8日）により、募集人員、試験科目、試験期日を発表した。当年以降、下記のように、「選抜試験科目」に各科目の細目が記されるようになった。

一選抜試験科目

国語及漢文（国文解釈、漢文解釈、書取、作文）外国語（解釈、国文英独仏訳、書取）数学（第一部入学志望者ニ対シテハ代数、幾何平面、第二部並第三部入学志望者ニ対シテハ代数、幾何平面、三角法）歴史及地理（第一部入学志望者ニ限ル）物理（第二部並第三部入学志望者ニ限ル）

備考

外国語ハ各高等学校ヲ通シテ英語トス

但シ第一高等学校ニ入学セントスル者ニ限り第一部丁類志望者ハ仏語、第一部丙類及第三部志望者ハ独語ヲ以テ選抜試験ヲ受クルコトヲ得

同5月8日、第一高等学校～第八高等学校は連名で『官報』に「生徒募集」広告を掲載し、出願期限と試験日割を掲示した²⁶⁾。

7月22日、文部省は『官報』に第二高等学校の入学許可者を掲載した。7月23日に第七高等学校造士館、7月26日に第四高等学校、7月28日に第五高等学校、7月29日に第三・第六・第八高等学校、8月4日に第一高等学校の入学許可者が『官報』に掲載された²⁷⁾。8月22日以降、10月3日にかけて、『官報』に各校の入学取消および追加入学許可の記事が11回掲載された。

2-3. 東北帝国大学農科大学大学予科の1913年入学者選抜試験

(1) 東北帝国大学農科大学大学予科の1913年入学者選抜試験の実施内容

5月6日より開催された高等学校長会議への参加は確認できない。予科主任の渡辺又次

郎の履歴資料には記載がない。青葉萬六（予科教授）の履歴資料²⁸⁾には「〔四十五年〕四月十五日 大学予科主任上京不在中事務代理ヲ命ス 農科大学」とあるが、会議の日程とは大きく異なる。

5月8日、東北農大は『官報』「生徒募集」広告記事にて、出願期限（6月17日、無試験検定志願者は5月31日）、試験期日（6月23日より）、試験科目（国語及漢文、英語、数学〔代数、幾何、三角〕、物理）を掲載した²⁹⁾。試験科目は前年と変わらない。

5月20日、入学志願者撰抜試験委員会が開催された³⁰⁾。出席者の記載はない。

会議では、試験問題の細目と配点、試験日割、受検者心得、監督者心得を制定した。試験問題の細目と配点の項を以下に抜萃する。

一、撰抜試験小科目及其採点標準ヲ定ムルノ件

- | | | |
|--------------|-------------------|----------------------|
| 一、国語及漢文 二〇〇点 | 一、国文解釈二問六〇点 | 二、漢文解釈二問六〇点 |
| | 三、書取一問三〇点 | 四 作文一問五〇点 |
| 二 英語 二〇〇点 | 一、解釈二問六〇点 | 二 国文英訳二問八〇点 |
| | 三、書取一問四〇点 | |
| 三、数学 二〇〇点 | 一 代数四問一〇〇点（各問二五点） | 二、幾何（平面）二問五〇点（各問二五点） |
| | | 三、三角二問五〇点（各問二五点） |
| 四 物理 一〇〇点 | 四問（各問二五点） | |

小科目ハ発表ス

前年と比較すると、各科目の細目の設問数や配点に細かい差異はあるが大勢は変わらない。「小科目ハ発表ス」とは、高等学校の「文部省告示」と同様に細目を発表する意と考えられるが、既に「生徒募集」広告は5月8日付『官報』に掲載しており、「発表」の方法や媒体については確認できていない。また、試験実施後、7月7日午前8時半までに点数記入用紙を教務部に提出し、7月7日・8日に成績調査をおこない、直ちに試験委員会を開催して成績を決定することを定めた。

7月7日、予告通り入学志願者撰抜試験委員会が開催された³¹⁾。出席者は、南鷹次郎（委員長、農科大学教授、農学実科主任）、渡辺又次郎（大学予科教授、同科主任）、小出房吉（農科大学教授、林学実科主任）、坂岡末太郎（土木工学科教授、同科主任）、藤田経信（水産学科教授、同科主任）、森本厚吉（農科大学助教授、教務部主任）、三田村孝吉（大学予科教授、同科数学主任）、青葉萬六（大学予科教授、同科第三年学級主任）、高杉榮次郎（大学予科教授、同科英語主任）、有島武郎（大学予科教授、同科第二年学級主任）、鈴木庄治郎（大学予科教授）、吹田順助（大学予科教授、同科独語主任）、武原熊吉（大学予科教授）、玄地誠輔（大学予科教授）、木村勇（大学予科教授）、星野勇三（農科大学教授）の16名である。決議事項のうち、大学予科に関わる部分を抜き出す。

一、入学許可数及其他決議事項

大学予科百〇五名 物理学規定点ニ達セサルモノ三名アルモ数学ニ於テ優良ナル

ヲ以テ採用スルコト、セリ〔中略〕

右ノ通り入学ヲ許可スルコトニシ本年ハ補欠セサルコト、ス

一、大学予科志願者中無試験者福士貞吉ハ身体検査当日事故ノ為到着セズ無余儀学科試験期日ノ間ニ体格検査ヲ受ケシメタリ右ハ無試験志願者ニ限り試験期日中体格検査ヲ受ケタルモノハ事情ヲ斟酌シ許可スルコト、ス

一、普通受検者ハ体格検査当日ニ出頭セザルモノハ何等ノ事情アルモ合格セシメサルコト、決定ス

前年と比較して、満点の4分の1という最小限点数が明記されていないが、「規定点」が該当するとみなされる。当年も前年と同様に、物理で最小限点数を満たさない場合に数学の高得点をもって合格の措置をとっている。

7月11日、文部省は『官報』に東北農大予科の入学許可者を掲載した³²⁾。

(2) 東北帝国大学農科大学大学予科の1913年入学者選抜試験受験者の体験記

東北農大予科の1913年入学試験の受験体験記として、表4のとおり1点を確認している。

表4 1913年の東北帝国大学農科大学大学予科受験者の体験記

著者名	記事名	掲載誌名	出版年月
大沢正之	札幌農学校と神中	『札幌同窓会誌』復刊号	1966年12月

体験記は志望動機に関わるものである。

大沢正之は、1912年に中学校を卒業して第八高等学校を受験したが合格ならず、上京して明治大学内の明治高等予備校で受験勉強をして、「安全策」として高等学校以外の志望校として東北農大予科を志願した³³⁾。

2-4. 小結

高等学校の1913年入学試験について、高等学校長会議では試験要項と入学者無試験検定について諮問がなされた。無試験検定入学は、当年は存置となったが、翌年以降は各高等学校の任意とすることが決議書に明記された。試験科目は前年と同様であったが、文部省告示において各科目の細目が示された点が異なる。

東北農大予科の高等学校長会議への出席は確認できていない。ただし、1911年と同様に試験日程を高等学校に先んじることが決議された。

試験科目は、前年に続き、高等学校の第二部・第三部と同様である。入学志願者撰抜試験委員会では、試験科目と配点に関する決議において、前年と変わって細目を発表することが記載された。高等学校の試験科目細目が文部省告示に記載されたこととの関連をうかがわせるが、実際の公表について確認できていない。入学許可者決定の決議では、基準点

が設けられたことと、物理で最小限点数に満たなかった受験者を数学の高得点をもって入学許可とした。前年と同様の措置がとられたとみなされる。

3. 高等学校と東北帝国大学農科大学大学予科の1914年入学者選抜試験

1914年に実施した高等学校および東北農大予科の入学者選抜試験について考察するにあたり、両者の試験日程の概略を表5に示す。

表5 高等学校および東北帝国大学農科大学大学予科の1914年入学者選抜試験の日程

月	日	高等学校	日	東北帝国大学農科大学大学予科
4月	27日	高等学校長会議〔～5月1日〕		
	30日	「高等学校大学予科入学者選抜試験規程」を改正(文部省令第18号)		
5月	1日	「本年各高等学校ニ入学セシムヘキ生徒数及選抜試験ニ関スル事項」(文部省告示第91号)	1日	『官報』「生徒募集」広告掲載
	1日	『官報』「生徒募集」広告掲載	20日	出願期限〔無試験検定希望者〕
6月	15日	出願期限	5日	出願期限
			15日	入学試験実施
7月	11日	入学試験実施〔～14日〕	7日	『官報』「入学許可」掲載
	21日	『官報』「入学許可」掲載〔二高〕〔以降、一高・三高～八高が順次掲載〕		

典拠)『文部省年報』、『官報』、『朝日新聞』、『読売新聞』より作成。

3-1. 1914年開催の高等学校長会議における決議

1914年4月27日～5月1日の日程で、文部省は高等学校長会議を開催した³⁴⁾。参加者を示す資料は確認できていない。

「大正三年五月高等学校長会議決議書」³⁵⁾によれば、入学者選抜試験に関わっては、試験の日程、募集人員、試験科目、無試験検定等について決議がなされた。

試験日程については前年と変わらない。東北農大予科を他の各高等学校に先行させて第一～第八高等学校は同時に施行することとし、高等学校の日程を出願期限6月15日、試験期日7月11日～14日とした。東北農大予科について具体的な日付の記載はない。

募集人員に関わっては、第3日(4月29日)に部類の変更が決議された³⁶⁾。従来、高等学校第二部は帝国大学進学後の志望科によって、甲類(工科)と乙類(理科・農科・医科の内薬学科)に分けて募集人員を定めていた。しかし、乙類において入学後に志望数の偏りが生じる弊害があるため、農科を分離して「丙」類とした。この変更は、4月30日付『官報』にてただちに「高等学校大学予科入学者選抜試験規程」の改正³⁷⁾(文部省令第18号)として公布された。

試験科目は、国語及漢文と外国語を第一部～第三部に共通とし、第一部には数学（代数、幾何平面）と歴史及地理、第二部・第三部には数学（代数、幾何平面及立体、三角法）と化学を課した。第二部・第三部において、幾何立体が増え、物理が化学に置き換わっている。

なお、数学について前年は「一部ハ二部、三部ト問題ヲ異ニスルコト」とされていた。当年は、「二部、三部ノ代数四問中三問及平面幾何二問ハ一部ト同問題トスルコト」と注している。設問数は、第一部は代数3問・幾何平面2問、第二部・第三部は代数4問・幾何平面2問・幾何立体1問・三角法1問のため、第一部で使用する問題のすべてが第二部・第三部と共通化されることとなった。

無試験検定については、文部省告示の内容を決議した中に「第一及第三高等学校ニ於テハ無試験検定ヲ行ハス」との記述がある。前年の「各学校随意トスルコト」との決議にもとづいて、競争率の高い学校が無試験検定を廃止したものとみなされる。当年以降、1917年まで変更はない。

3-2. 高等学校の1914年入学者選抜試験

5月1日、文部省は「本年各高等学校ニ入学セシムヘキ生徒数及選抜試験ニ関スル事項」³⁸⁾（文部省告示第91号、1914年5月1日）により、募集人員、試験科目、試験期日を発表した。試験科目では、前年と同様に細目まで示している。

同5月1日、第一高等学校～第八高等学校は連名で『官報』に「生徒募集」広告を掲載し、出願期限と試験日割を掲示した³⁹⁾。

7月21日、文部省は『官報』に第二高等学校の入学許可者を掲載した。22日に第六高等学校、25日に第四・第五高等学校、27日に第三高等学校、28日に第七高等学校造士館・第八高等学校、29日に第一高等学校の入学許可者が『官報』に掲載された⁴⁰⁾。8月24日以降、10月14日にかけて、『官報』には各校の入学取消および追加の入学許可の記事が12回掲載された。

3-3. 東北帝国大学農科大学大学予科の1914年入学者選抜試験

(1) 東北帝国大学農科大学大学予科の1914年入学者選抜試験の実施内容

4月27日～5月1日に開催された高等学校長会議には、東北農大予科主任の渡辺又次郎が出席した。渡辺の履歴資料⁴¹⁾には「々〔大正三年〕四月廿一日 高等学校長会議参列ノ為メ上京ヲ命ス 農科大学」とある。

5月1日、東北農大は『官報』「生徒募集」広告記事⁴²⁾にて、出願期限（6月5日、無試験検定志願者は5月20日）、試験期日（6月15日より）を掲載した。試験科目は、細目も示した。

(二) 選抜試験科目 国語及漢文【解釈、書取、作文】 英語【解釈、英訳、書取】
数学【代数、三角法、幾何（平面、立体）】 化学

前年とくらべて試験科目のうち物理が化学に変わった点と、科目の細目も示している点は、ともに高等学校第二部・第三部と同様である。

7月1日、入学志願者撰抜試験委員会が開催された⁴³⁾。出席者は、渡辺又次郎（委員長、大学予科教授、同科主任）、坂岡末太郎（土木工学科教授、同科主任）、藤田経信（水産学科教授、同科主任）、小出房吉（農科大学教授、林学実科主任）、森本厚吉（農科大学助教授、教務部主任）、三田村孝吉（大学予科教授、同科数学主任）、青葉萬六（大学予科教授、同科第三年学級主任）、明峰正夫（農科大学助教授）、高杉榮次郎（大学予科教授、同科英語主任）、有島武郎（大学予科教授、同科第二年学級主任）、鈴木庄治郎（大学予科教授）、吹田順助（大学予科教授、同科独語主任）、木村勇（大学予科教授）、武原熊吉（大学予科教授）、玄地誠輔（大学予科教授）、小川忠之助（庶務課長、官報報告主任、書記）、佐久間政一（大学予科教授）の17名である。大学予科に関わる決議事項を抜き出す。

- 一、入学志願成績中例年ノ通各科目満点ノ四分ノ一ニ満タサルモノハ許可セザルコト但シ其入学各科主任ノ意見ニヨリ多少斟酌スルコトヲ得
異議ナク決定
- 二、全四分ノ一ニ満タサル学科二科目アルトキハ絶対入学許可セシメサルコト原案ノ通り決定
- 三、入学許可者左記ノ通り決定ス
大学予科 渡辺九郎外百名〔中略〕

右決定午後四時散会

各科目の最小限点数を満点の4分の1とすることが通例となっていることが確認できる。「学科主任ノ意見」とは、最小限点数を下回った志願者に対する救済措置かと推測される。ただし、最小限点数に不足した科目が2科目以上あった場合は入学を許可しないことを明記した。

7月7日、文部省は『官報』に東北農大予科の入学許可者を掲載した⁴⁴⁾。

(2) 東北帝国大学農科大学大学予科の1914年入学者選抜試験受験者の体験記

東北農大予科の1914年入学試験の受験体験記として、表6のとおり3点を確認している。

表6 1914年の東北帝国大学農科大学大学予科受験者の体験記

著者名	記事名	掲載誌名	出版年月
GCR生	書取(国語)と体格の試験	『中学世界』第18巻第4号	1915年3月
田中勝吉	alma mater 北大農学部思い出	『札幌同窓会誌』第2号	1967年12月
西佐久一	北大とのかかわり—明治—大正—昭和の八十年—	『札幌同窓会誌』第6号	1980年12月

体験記は、志望動機に関わるもの2件(田中、西)と、試験に関わるもの1件(GCR生)

である。

田中勝吉は、大阪府立北野中学校の3年次に英語教師であった細江逸記（東京外国語学校1906年卒業）⁴⁵⁾ から「Boys, be ambitious の声未だ消えやらぬ札幌の学園こそ諸子の行く手の一つであろう」と呼びかけられ、志願を決意したという⁴⁶⁾。西佐久一は、創成高等小学校への通学やランニングで植物園になじみがあり、文武会の遊戯会にも親しんでいた⁴⁷⁾。

GCR生については個人を特定しえないが、1914年に実施した入学試験問題について「友達の成績を聞いてみると様々である」と述べているので、1914年入学者であると推定できる。入学試験についての記事は多々あるが、国語の書取や体格検査はあまり記されない事柄として、紹介をしている。国語の書取問題は、『諸官立学校入学試験問題集 大正三年度』（金刺芳流堂、1914年8月、177-181ページ）も掲載していない。その全文は以下のようである。

余は久しく、穩健著実なる学風と、誠実真摯なる研究との我学界に行はれん事を望めり、今此書を通読せるに、独りこの方面の要求を充すのみならず嚴正暢達の筆を以て、高尚深玄なる真理を通曉し易からしむる事に於て、毫も遺憾無きを覚ゆ。⁴⁸⁾

筆者であるGCR生は、受験生は往々にして国語の書取をあなどっているが、友人に聞くと「真摯」が書けた人は少なく、「穩健」を「温健」、「暢達」を「長達」に誤る人もいたという。体格検査については、「肺病 花柳病及び色盲」を除けば合格なので、自分で体格が十分でないと思っても入学後に養成すれば十分であるという。

3-4. 小結

高等学校の1914年入学試験について、高等学校長会議では試験要項と入学者無試験検定について諮問がなされた。試験科目は、数学において第一部と第二部・第三部に差を設ける点で前年と同様であるが、前年はすべての問題を異なるものにしていたところ、当年は第一部の問題を共通にして第二部・第三部に設問を追加する形式をとった。また、無試験検定入学は、前年の「各学校随意トスル」という決議を実施して第一・第三高等学校で実施しないことを決議した。

東北農大予科は、予科主任の渡辺又次郎が高等学校長会議に出席した。前年と同様に、試験日程を高等学校に先んじることが決議された。

試験科目は、前年に続き、高等学校の第二部・第三部と同様である。『官報』「生徒募集」では、科目の細目も発表した。入学志願者撰抜試験委員会における入学許可者決定の決議では、満点の4分の1という最小限点数を「例年ノ通」としており、基準として定着したことをうかがわせる。特定の科目への特別措置はみられないが、各科主任の意見による斟酌を認めた。一方、最小限点数を2科目以上で下回る際は入学許可としないことも定めた。

4. 高等学校と東北帝国大学農科大学大学予科の1915年入学者選抜試験

1915年に実施した高等学校および東北農大予科の入学者選抜試験について考察するにあたり、両者の試験日程の概略を表7に示す。

表7 高等学校および東北帝国大学農科大学大学予科の1915年入学者選抜試験の日程

月	日	高等学校	日	東北帝国大学農科大学大学予科
4月	12日	高等学校長会議〔6日間〕	19日	『官報』『生徒募集』広告掲載
	16日	「本年各高等学校ニ入学セシムヘキ生徒数及選抜試験ニ関スル事項」(文部省告示第90号)		
	19日	『官報』『生徒募集』広告掲載		
5月			31日	出願期限〔無試験検定希望者〕
6月	15日	出願期限	15日	出願期限
			21日	入学試験実施
7月	11日	入学試験実施〔～14日〕	12日	『官報』『入学許可』掲載
	22日	『官報』『入学許可』掲載〔二高、六高〕〔以降、一高、三高～五高、七高、八高が順次掲載〕		

典拠)『文部省年報』、『官報』、『朝日新聞』、『読売新聞』より作成。

4-1. 1915年開催の高等学校長会議における決議

1915年4月12日より6日間の日程で、文部省は高等学校長会議を開催した⁴⁹⁾。会議には、第二～第八高等学校の各校長、東北農大の予科主任渡辺又次郎、松浦鎮次郎専門学務局長が出席した⁵⁰⁾。

「大正四年四月高等学校長会議決議書」⁵¹⁾によれば、入学者選抜試験に関わっては、試験の日程、募集人員、試験科目について決議がなされた。

試験日程については前年と変わらない。東北農大予科を他の各高等学校に先行させて第一～第八高等学校は同時に施行することとし、高等学校の日程を出願期限6月15日、試験期日7月11日～14日とした。東北農大予科について具体的な日付の記載はない。

試験科目は、国語及漢文と外国語を第一部～第三部に共通とし、第一部には数学(代数、幾何平面)と歴史及地理、第二部・第三部には数学(代数、幾何平面及立体)と物理と動物を課した。前年と比較すると、第二部・第三部において、三角法が減り、化学が物理と動物に置き換わっている。当年も、数学で第一部に出題する設問は第二部・第三部とも共通とし、第二部・第三部には追加の問題を設けることとした。

4-2. 高等学校の1915年入学者選抜試験

4月16日、文部省は「本年各高等学校ニ入学セシムヘキ生徒数及選抜試験ニ関スル事

項]⁵²⁾(文部省告示第90号、1915年4月16日)により、募集人員、試験科目、試験期日を発表した。試験科目では、前年と同様に細目まで示している。

4月19日、第一高等学校～第八高等学校は連名で『官報』に「生徒募集」広告を掲載し、出願期限と試験日割を掲示した⁵³⁾。

7月22日、文部省は『官報』に第二・第六高等学校の入学許可者を掲載した。24日に第四高等学校、26日に第五高等学校、27日に第三高等学校・第七高等学校造士館、28日に第八高等学校、29日に第一高等学校の入学許可者が『官報』に掲載された⁵⁴⁾。8月23日以降、9月28日にかけて、『官報』には各校の入学取消および追加の入学許可の記事が14回掲載された。

4-3. 東北帝国大学農科大学大学予科の1915年入学者選抜試験

(1) 東北帝国大学農科大学大学予科の1915年入学者選抜試験の実施内容

4月12日より開催された高等学校長会議には、東北農大予科主任の渡辺又次郎が出席した。

4月19日、東北農大は『官報』「生徒募集」広告記事⁵⁵⁾にて、出願期限(6月15日、無試験検定志願者は5月31日)、試験期日(6月21日より)を掲載した。試験科目は、細目も示している。

二、選抜試験科目 国語及漢文(国文解釈、漢文解釈、書取、作文) 英語(英文解釈、国文英訳、書取) 数学(代数、幾何【平面、立体】) 物理 動物
前年とくらべて試験科目のうち化学が物理と動物に変わった点と、科目の細目もより詳しく示している。科目の示し方において、高等学校第二部・第三部により近くなった。

7月12日、文部省は『官報』に東北農大予科の入学許可者を掲載した⁵⁶⁾。

ところで、3月5日発行の雑誌『中学世界』「受験問答」欄に、東北農大予科に関する質問と回答が掲載されている⁵⁷⁾。

問 東北農大予科と一高一部とを二重志願せんとす、もし先づ農大に入学を許可され、これを取消さる中に一高に入学許可を官報に発表せられたる場合、農大を止め、一高に入らんとするには如何なる手続を要するか。(本郷発奮生)

答〔中略〕二校以上に出願して、二校以上の入学試験に合格した場合には、最初に入学許可を発表した学校に入学し、次の発表された入学許可は取消す規定になつて居るから、たとへ幸にして二校以上に合格しても、任意の学校に入学することは出来ぬことになつて居る。

東北農大予科と一高を併願して両校に合格した場合、前者を辞退して後者に入学することができるかという問いに対し、先に入学許可をうけた学校に入学する規程があると回答している。これは1907年8月17日付専門学務局伺定にて東北農大予科に適用された文部省告示第96号(1903年4月30日)を指しており、志願者が注意を要していたことがうかがえる。

(2) 東北帝国大学農科大学大学予科の1915年入学者選抜試験受験者の体験記

東北農大予科の1915年入学試験の受験体験記として、表8のとおり4点を確認している。

表8 1915年の東北帝国大学農科大学大学予科受験者の体験記

著者名	記事名	掲載誌名	出版年月
小笠原亀一	在学当時の思出	『札幌同窓会誌』第2号	1967年12月
加納瓦全	昔を偲んで	『札幌同窓会誌』第2号	1967年12月
村越信夫	あこがれの札幌	『札幌同窓会誌』第3号	1968年11月
足立仁	古い時代を顧みて	『札幌同窓会誌』第3号	1968年11月

体験記はいずれも志望動機に関わるものである。

小笠原亀一は青森県立八戸中学校出身で、同郷の新渡戸稲造を慕って志願した⁵⁸⁾。村越信夫は、神奈川県立小田原中学校における当時第一高等学校校長を務めていた新渡戸稲造の講話を聞き、東京遊学中にも本郷中央教会にて新渡戸の話聞いたことを契機としている⁵⁹⁾。加納瓦全は、自宅が北13条にあって東北農大のキャンパスを遊び場にしていたことと、母校の庁立札幌中学校長であった山田幸太郎（札幌農学校第12期生、1894年卒業）の人格に惹かれ、東北農大に親しみを覚えたという⁶⁰⁾。足立仁は、亡父の足立元太郎（札幌農学校第2期生、1881年卒業）の母校として憧れを抱いていたという⁶¹⁾。

志望動機は、主に札幌農学校卒業生によるものであった。中学校の校長、講演者、同郷の先輩として、後進に影響を与えていたことがうかがえる。

4-4. 小結

高等学校の1915年入学試験について、高等学校長会議では試験要項について諮問がなされた。試験科目は前年と比して、第二部・第三部において数学の三角法が無くなり、化学に替わり物理と動物を課すこととなった。数学において第一部と第二部・第三部に差を設け、第一部の問題を共通にして第二部・第三部に設問を追加する形式をとる点は変わらない。

東北農大予科は、予科主任の渡辺又次郎が高等学校長会議に出席した。前年と同様に、試験日程を高等学校に先んじることが決議された。

試験科目は、前年に続き、高等学校の第二部・第三部と同様である。『官報』「生徒募集」では、科目の細目も発表した。数学の三角法が無くなり、化学に替わり物理と動物を課した。また、「生徒募集」広告の記載方法においても、国語及漢文の細目の示し方等、高等学校により近い形式になった。

5. 高等学校と東北帝国大学農科大学大学予科の1916年入学者選抜試験

1916年に実施した高等学校および東北農大予科の入学者選抜試験について考察するにあたり、両者の試験日程の概略を表9に示す。

表9 高等学校および東北帝国大学農科大学大学予科の1916年入学者選抜試験の日程

月	日	高等学校	日	東北帝国大学農科大学大学予科
4月	28日	高等学校長会議〔～5月5日カ〕		
5月	5日	「本年各高等学校ニ入学セシムヘキ生徒数及選抜試験ニ関スル事項」(文部省告示第75号)	2日	『官報』「生徒募集」広告掲載
	5日	『官報』「生徒募集」広告掲載	31日	出願期限〔無試験検定希望者〕
6月	15日	出願期限	15日	出願期限
			22日	入学試験実施
7月	11日	入学試験実施〔～14日〕	11日	『官報』「入学許可」掲載
	25日	『官報』「入学許可」掲載〔四高～六高〕〔以降、一高～三高、七高、八高が順次掲載〕		

典拠)『文部省年報』、『官報』、『朝日新聞』、『読売新聞』より作成。

5-1. 1916年開催の高等学校長会議における決議

1916年4月28日より、文部省は高等学校長会議を開催し、第一～第八高等学校の各校長、東北農大の予科主任渡辺又次郎等が出席した⁶²⁾。

「大正五年四月高等学校長会議決議書」⁶³⁾によれば、入学者選抜試験に関わっては、試験の日程、募集人員、試験科目について決議がなされた。

試験日程については前年と同様である。東北農大予科を他の各高等学校に先行させて第一～第八高等学校は同時に施行することとし、高等学校の日程を出願期限6月15日、試験期日7月11日～14日とした。東北農大予科について具体的な日付の記載はない。

試験科目は、国語及漢文と外国語を第一部～第三部に共通とし、第一部には数学(代数、平面幾何)と歴史、第二部・第三部には数学(代数、平面幾何、三角法)と化学を課した。前年と比較すると、第一部において地理が減り、第二部・第三部において立体幾何が減って三角法が増え、物理と動物が化学となった。当年は、数学の問題は「一部ノ問題ト二部及三部ノ問題トハ各別ニ之ヲ選定スルコト」と、すべて異なる問題とするよう変わった。

5-2. 高等学校の1916年入学者選抜試験

5月5日、文部省は「本年各高等学校ニ入学セシムヘキ生徒数及選抜試験ニ関スル事項」⁶⁴⁾(文部省告示第75号、1916年5月5日)により、募集人員、試験科目、試験期日を発

表した。試験科目では、前年と同様に細目まで示している。

同5月5日、第一高等学校～第八高等学校は連名で『官報』に「生徒募集」広告を掲載し、出願期限と試験日割を掲示した⁶⁵⁾。

7月25日、文部省は『官報』に第四・第五・第六高等学校の入学許可者を掲載した。27日に第二高等学校・第七高等学校造士館、28日に第三高等学校、29日に第一・第八高等学校の入学許可者が『官報』に掲載された⁶⁶⁾。8月21日以降、10月3日にかけて、『官報』には各校の入学取消および追加の入学許可の記事が10回掲載された。

5-3. 東北帝国大学農科大学大学予科の1916年入学者選抜試験

(1) 東北帝国大学農科大学大学予科の1916年入学者選抜試験の実施内容

4月28日より開催された高等学校長会議には、東北農大予科主任の渡辺又次郎が出席した。

5月2日、東北農大は『官報』「生徒募集」広告記事⁶⁷⁾にて、出願期限（6月15日、無試験検定志願者は5月31日）、試験期日（6月21日より）を掲載した。試験科目は、細目も示している。

二、選抜試験科目 国語及漢文【国文解釈、漢文解釈、書取、作文】 英語【解釈、国文英訳、書取】 数学【代数、三角法、平面幾何】 化学
前年とくらべて、試験科目のうち物理と動物が化学に変わっており、高等学校第二部・第三部と同様となっている。

7月11日、文部省は『官報』に東北農大予科の入学許可者を掲載した⁶⁸⁾。

10月1日発行の雑誌『中学世界』誌上において、渡辺又次郎が東北農大予科の受験案内をおこなっている⁶⁹⁾。渡辺は、東北農大予科が高等学校第二部丙類と同じ程度であることを述べた。また、試験科目と採点法も高等学校と全く同一であり、試験問題が同一でないのは日程が異なるためと説明した。試験期日は高等学校に約半月先行することになっているとする。ただし、併願した際は、先に入学許可を発表する東北農大予科に入学する必要がある旨を注意している。

(2) 東北帝国大学農科大学大学予科の1916年入学者選抜試験受験者の体験記

東北農大予科の1916年入学試験の受験体験記として、表10のとおり1点を確認している。

表10 1916年の東北帝国大学農科大学大学予科受験者の体験記

著者名	記事名	掲載誌名	出版年月
北島敏三	同窓生の思い出	『札幌同窓会誌』第4号	1970年3月

体験記は志望動機に関わるものである。

北島敏三は、校風へのあこがれを志望動機としている⁷⁰⁾。

5-4. 小結

高等学校の1916年入学試験について、高等学校長会議では試験要項について諮問がなされた。試験科目は前年と比して、第一部において地理がなくなり、第二部・第三部において数学の立体幾何が三角法へ替わり、物理と動物が化学になった。数学では、第一部と第二部・第三部とで別途問題を選定することとなり、共通問題が無くなった。

東北農大予科は、予科主任の渡辺又次郎が高等学校長会議に出席した。前年と同様に、試験日程を高等学校に先んじることが決議された。

試験科目は、数学の三角法が無くなり、化学に替わり物理と動物を課し、前年に続いて高等学校の第二部・第三部と同様である。

6. 高等学校と東北帝国大学農科大学大学予科の1917年入学者選抜試験

1917年に実施した高等学校および東北農大予科の入学者選抜試験について考察するにあたり、両者の試験日程の概略を表11に示す。

表11 高等学校および東北帝国大学農科大学大学予科の1917年入学者選抜試験の日程

月	日	高等学校	日	東北帝国大学農科大学大学予科
3月	5日	高等学校長会議〔～10日〕		
4月	13日	第2回高等学校長会議〔～17日〕	24日	『官報』「生徒募集」広告掲載
	27日	「高等学校大学予科入学者選抜試験規程」を改正（文部省令第4号）		
	27日	「高等学校大学予科入学者無試験検定期程」を改正（文部省令第5号）		
	27日	「本年各高等学校ニ入学セシムヘキ生徒ノ概数、選抜試験ニ関スル細目及出願ノ手続等」（文部省告示第95号）		
5月	31日	出願期限	31日	出願期限〔無試験検定希望者〕
6月			15日	出願期限
			23日	入学試験実施
7月	11日	入学試験実施〔～14日〕	5日	『官報』「入学許可」掲載
8月	9日	『官報』「入学許可」掲載〔一高～八高〕		

典拠)『文部省年報』、『官報』、『朝日新聞』、『読売新聞』より作成。

6-1. 1917年開催の高等学校長会議における決議

1917年3月5日～10日の日程で、文部省は高等学校長会議を開催し、第一～第八高等学校の各校長、岡田良平文部大臣、松浦鎮次郎専門学務局長が出席した⁷¹⁾。東北農大予科からの出席は確認できない。

会議では、従来のように各高等学校が個別で同時に試験をおこなった場合、倍率の高い学校に不合格だった生徒の方が、倍率の低い学校に合格した生徒より成績が良い場合が生じることが問題とされた。そこで全高等学校が共通問題で試験を同時におこない、成績上位者から順番に志望校・部類に割り当てるとする「集合試験制度」が検討された。採点を公平にする方法、学校と部類のどちらを優先して割り当てるか、といった問題を協議し、最終的に「集合試験制度」が採用され、ふたたび「共通試験総合選抜方式」⁷²⁾が採られた。ただし、試験期日・科目・定員は後日の第2回高等学校長会議に持ち越された⁷³⁾。

文部省は、4月13日～17日の日程で第2回高等学校長会議を開催し、第一～第八高等学校の各校長松浦鎮次郎専門学務局長が出席した⁷⁴⁾。東北農大予科主任の渡辺又次郎が出席したという資料は確認できないが、青葉萬六(予科教授)の履歴資料⁷⁵⁾には「[大正六年]四月十日 大学予科主任全講堂主任出張不在中事務代理ヲ命ス 農科大学」とある。4月10日より渡辺又次郎が上京したのは、13日より開催の高等学校長会議に出席するためと考えられ、東北農大予科も会議に参加したと推定できる。

会議では、入学試験に関する文部省令および文部省告示の内容について決議した⁷⁶⁾。

「告示案」⁷⁷⁾によれば、試験科目は、国語及漢文と外国語を第一部～第三部に共通とし、第一部には数学(代数、平面幾何)と歴史、第二部・第三部には数学(代数、平面幾何、三角法)と物理を課した。前年との相違として、第二部・第三部の化学が物理に変わった。

「高等学校入学試験ニ関スル細則」⁷⁸⁾によれば、試験日程は、出願期限が5月31日、無試験検定の実施が6月1日、体格検査が7月8日～10日、試験実施が7月11日～14日、入学許可者の『官報』掲載が8月8日、補欠入学者の『官報』掲載が8月30日であった。

6-2. 高等学校の1917年入学者選抜試験

4月27日、文部省は「高等学校大学予科入学者選抜試験規程」を改正した⁷⁹⁾(文部省令第4号、1917年4月27日)。志願者は、志望の類(同一部内に限る)と学校を、2つ以上併願することを許され、成績順に各学校に割り当てられることとなった。

同4月27日、文部省は「高等学校大学予科入学者無試験検定規程」も改正した⁸⁰⁾(文部省令第5号、1917年4月27日)。従来は募集人員の5分の1以内に限っていた無試験検定者数は、20分の1に変更された。

同4月27日、文部省は「本年各高等学校ニ入学セシムヘキ生徒ノ概数、選抜試験ニ関スル細目及出願ノ手続等」⁸¹⁾(文部省告示第95号、1917年4月27日)において、募集人員、試験科目、出願期限、試験期日・日割を発表した。前年まで「生徒募集」広告に掲載された内容も、文部省告示にて一括して掲載されている。

8月9日、文部省は『官報』に第一～第八高等学校の入学許可者を掲載した。また、9月10日、補欠入学者を掲載した⁸²⁾。

6-3. 東北帝国大学農科大学大学予科の1917年入学者選抜試験

(1) 東北帝国大学農科大学大学予科の1917年入学者選抜試験の実施内容

4月13日より開催された第2回高等学校長会議には、東北農大予科主任の渡辺又次郎が出席したとみられる旨は前述した。

4月24日、東北農大は『官報』「生徒募集」広告記事⁸³⁾にて、出願期限(6月15日、無試験検定志願者は5月31日)、試験期日(6月23日より)を掲載した。試験科目は、細目も示している。

選抜試験科目 国語及漢文【国文解釈、漢文解釈、書取、作文】 英語【解釈、国文英訳、書取】 数学【代数、平面幾何、三角法】 物理

前年とくらべて、試験科目のうち化学が物理に変わっており、高等学校第二部・第三部と共通している。

7月5日、文部省は『官報』に東北農大予科の入学許可者を掲載した⁸⁴⁾。

(2) 東北帝国大学農科大学大学予科の1917年入学者選抜試験受験者の体験記

東北農大予科の1917年入学試験の受験体験記として、表12のとおり2点を確認している。

表12 1917年の東北帝国大学農科大学大学予科受験者の体験記

著者名	記事名	掲載誌名	出版年月
蝦夷の男子	札幌農大奮闘の記	『中学世界』第20巻第12号	1917年8月
須藤直吉	久闊の札幌行とクラーク訓話の討究	『札幌同窓会誌』第3号	1968年11月

体験記は、志望動機に関わるもの1件(須藤)と、受験体験記1件(蝦夷の男子)である。

須藤直吉は、養父である須藤善一郎が北海道に農場をもっていたことで、道内の東北農大を志願した⁸⁵⁾。

「蝦夷の男子」は、札幌出身で、文中に受験票の番号が「八十いくらと言ふ若い番号」で「三で割りきれ」と述べている。1917年合格者の入学願書を綴った簿書⁸⁶⁾で各願書の左肩に付された番号を確認すると、該当するのは庁立札幌第一中学校出身で志願者番号「八十一」の田村常次郎と推定できる⁸⁷⁾。

6-4. 小結

高等学校の1917年入学試験について、高等学校長会議では、学校間の倍率の格差に伴う学力の不均衡を是正するため、「集合試験制度」の採用が決議され、「高等学校大学予科入学者選抜試験規程」を改正した。全高等学校が共同で入試業務にあたるため、日程も詳細に定められた。また、「高等学校大学予科入学者無試験検定規程」も改正せられ、無試験

検定による入学者の人数も、募集人員の20分の1に減少せられた。試験要項は文部省告示にて発表し、第二部・第三部の化学を物理に替えた。

東北農大予科は、予科主任の渡辺又次郎が第2回高等学校長会議に出席したと思われるが、東北農大予科に関する決議事項は確認できない。

試験科目は、高等学校第二部・第三部と同様に、化学に替わり物理を課した。

試験期日および入学許可者の発表は、例年通り高等学校に先行した。

おわりに

1907年～1917年における東北農大予科と高等学校の入学者選抜試験の変遷をとりまとめる。当該時期は、東北農大設置前で札幌農学校として試験を実施した1907年と、東北農大となり高等学校長会議に出席した1908年～1917年の2つに分類できる。

まず、1907年についてとりあげる。

1907年の高等学校の入学試験は、前年に引き続き「共通試験総合選抜方式」⁸⁸⁾で実施した。一方、高等学校長会議では、志望順位の偏りを問題視する前年の建議をうけて、将来的な試験制度改正の希望を決議し、変革を見込んでいた。

同年は、札幌農学校が東北農大へ昇格した年であった(勅令第236号、1907年6月22日公布、同年9月1日施行)。札幌農学校は勅令公布の以前から帝国大学への組織改編を見込み、4月22日付で文部大臣宛てに「大学予科」生徒となる旨を盛り込んで生徒募集広告を掲載したいと稟請し、5月13日付『官報』に、9月より「帝国大学農科大学」の「大学予科生」となることと、大学予科は高等学校大学予科第二部と程度を同じくすることを掲載した。

入学試験科目は、高等学校が国語及国文、外国語、数学、物理学、化学、歴史であったのに対し、札幌農学校は歴史ではなく動物学と植物学を課した。高等学校第二部に相当する農科大学附設の大学予科に合致した科目といえる。

日程は、生徒募集広告の掲載日・出願期限・試験期日は高等学校が先行したが、入学許可者の発表は札幌農学校が先であった。これは、文部省直轄学校を2校以上志願した場合、最前に入学許可を受けた学校に入学することを定めた文部省告示第96号(1903年4月30日)をうけて、札幌農学校が優先的に入学者を確保するために、高等学校に先んじて入学許可者を発表したものと推定できる。同告示は、1907年8月17日付専門学務局伺定により、東北農大予科にも適用されることとなった。

次に、1908年～1917年の期間について、要素ごとに概括する。

第一に高等学校長会議についてとりあげる。同会議は、毎年、高等学校の入学試験要項を決議した。東北農大予科は、宮部金吾(1908年)、溝淵進馬(1909年～1911年)、渡辺又次郎(1912年、1914年～1917年)が、毎年の会議に出席した。1913年の出席は確認できないが、東北農大予科の試験日程に関わる決議がなされている。東北農大が設置されて以降

の毎年の高等学校長会議に、東北農大予科は関わっていたといえる。

第二に、試験日程についてとりあげる。

1908年は、前年までの共通試験総合選抜方式を廃止し、各高等学校が文部省と協議して定めることと決議された。実際の日程は、七高・八高が6月下旬、一高～六高が7月下旬で、東北農大予科は最も遅かった。この「単独選抜方式」⁸⁹⁾は、以降1916年まで続く。

1909年と1910年は七高と東北農大予科が、1911年・1913年～1916年は東北農大が、他の高等学校に先行して試験を実施することが決議された。1912年は決議書が確認できないが、実際の日程は他の年と同じく東北農大予科が先行しており、同様の決議がなされたものと推測できる。これは、先述した文部省告示第96号(1903年4月30日)にもとづき、先に入学許可を発表することで入学者を確保するものであった。実際には、東北農大予科で発表後に入学許可取消を求める志願者もいたようであるが、第一志望で募集人員が埋まる程度に入学者を確保できた⁹⁰⁾。

1917年の高等学校の入学試験は、倍率の高低による入学許可者成績の偏りを理由に、再び「共通試験総合選抜方式」へと変わった。東北農大予科の日程に関する高等学校長会議の決議は確認できないが、前年までと同様に、高等学校一斉の試験実施および入学許可者に先んじた日程となっている。

東北農大予科は、高等学校長会議が日程に関する特例措置を決議しはじめた1909年以降、高等学校に先行し試験を実施して入学者を確保した。

第三に、無試験入学者検定についてとりあげる。

高等学校では、1910年の高等学校長会議にて無試験入学の導入を決議し、「高等学校大学予科入学者選抜試験無試験検定規程」(文部省令第11号、1910年5月14日)が制定された。東北農大では、1911年3月に同規程の適用を文部大臣宛てに稟請し、別途校則を設けることをもって1911年の入学試験から無試験入学制を導入した。

第四に、試験科目についてとりあげる。

高等学校の試験科目は、高等学校長会議にて決議された。東北農大予科が初めて会議に出席した1908年の「決議書」に、「札幌 100」との書き込みがあり、高等学校と同科目で配点を変える旨の記載があるが取り消してあり、以降、東北農大予科に関する決議は確認できない。東北農大予科の試験科目は1908年～1917年を通して高等学校第二部・第三部と同じである。

また、高等学校は試験科目を毎年の文部省告示にて示したが、1913年以降、各科目の細目も掲載している。東北農大は『官報』「生徒募集」広告にて試験科目を発表しており、1912年の入学志願者撰抜試験委員会では細目を公表しないことを決議していたが、1913年の同委員会では細目を公表することを決議するようになり、1914年の「生徒募集」広告から実際に細目を掲載している。

第五に、入学許可の最小限点数についてとりあげる。

1910年開催の高等学校長会議において、各科目で満点の4分の1を最小限点数として、

それを下回る場合は総評点が高くても入学を認めないことが決議された。ただし、ある程度において学校長の斟酌を許容したとみられる。

東北農大の入学者選抜試験委員会では、決議録の残る1911年でこの方法を採用していることが確認できる。1914年の決議録では、この制度が例年のこととされ、予科主任の斟酌が認められている。高等学校長会議における決議内容に沿った運用がおこなわれていたことがうかがわれる。渡辺又次郎が『中学世界』第19巻第13号にて「試験課目と採点法とは如何かといふに、これも亦高等学校のと全く同一である」と述べていたことが裏付けられる。

以上をまとめると、東北農大予科は、設置当年の1907年は高等学校より先に入学許可を發表するという点でのみ関わりを有した。1908年以降は高等学校長会議に参加し、1908年以降は試験科目、1909年以降は試験期日、1911年以降は無試験入学と入学許可の最小限点数で、それぞれ高等学校に準拠している。東北農大予科は、制度上異なる高等学校第二部と程度を同じくすることを掲げ、実際に、入学試験においても同じ試験内容・基準であろうと努めつつ、入学者を確保するため試験日程を高等学校に先行させる措置をとっていた。

[注]

- 1) 1907年6月22日付『官報』1ページ。
- 2) 同上、1-2ページ。
- 3) 「東北帝国大学農科大学規則」(1907年6月27日制定)、『東北帝国大学農科大学一覽 自明治四十年至明治四十一年』1907年12月、31, 40-43ページ。
- 4) 拙稿「東北帝国大学農科大学大学予科及び高等学校における入学者選抜試験制度の変遷(1)」(『北海道大学大学文書館年報』第18号、2023年3月)。
- 5) 『教育研究』(第98号、1912年5月、109ページ)、『教育研究』(第99号、1912年6月、107ページ)。
- 6) 「高校入学人員問題」(1912年4月22日付『朝日新聞』朝刊4面)。
- 7) 「高等学校長会議」(1912年4月24日付『読売新聞』朝刊2面)。
- 8) 「高校長会議結果」(1912年5月1日付『朝日新聞』朝刊4面)。
- 9) 1912年4月27日付『官報』17ページ。
- 10) 同上、29-30ページ。
- 11) 1912年7月20日付『官報』9ページ、1912年7月24日付『官報』6-7ページ、1912年7月26日付『官報』4-5ページ、1912年7月27日付『官報』5ページ、1912年7月30日付『官報』8-11ページ、1912年8月3日付『官報』5-6ページ。
- 12) 「退職者履歴資料五、1、大正9」所収(北海道大学大学文書館所蔵、以下「退職者履歴資料」の所蔵は同じ)。文中の〔 〕は筆者が補った箇所を示す。以下同じ。
- 13) 1912年4月20日付『官報』40-41ページ。
- 14) 「高等学校長会議(第三日)」(1909年4月18日付『読売新聞』朝刊2面)。
- 15) 「高等学校長会議(入学試験決定)」(1910年5月10日付『読売新聞』朝刊2面)。
- 16) 「高等学校長会議(第三日目)」(1911年4月16日付『読売新聞』朝刊2面)。
- 17) 「入学者選抜試験委員会決議録 明治四十四年六月以降 東北帝国大学農科大学教務部」(帝大/2019/0290、北海道大学大学文書館所蔵、以下同じ)所収。

- 18) 同上。
- 19) 1912年7月13日付『官報』9-10ページ。
- 20) 小林直村「尽きぬ思い出と感謝」(『札幌同窓会誌』第4号、1970年3月、61-62ページ)。
- 21) 板垣信之「その頃の学徒たち 強情な弘前の人」(『札幌同窓会誌』第2号、1967年12月、31ページ)。
- 22) 『日本帝国文部省第四十一年報 自大正二年四月至大正三年三月』上巻(1915年10月)、3ページによる。「高等学校長会議終了」(1913年5月9日付『読売新聞』朝刊2面)には、「〔八日〕正午過ぎ散会せるが此れにて会議を終了したり」とあるが、続けて「十日午後奥田文相は出席者一同を官邸に招待すべし」とあり、10日までを会期として扱ったものとみなされる。
- 23) 「高等校長会議」(1913年5月7日付『朝日新聞』朝刊4面)。
- 24) 1913年5月12日付省専5号、松浦寅三郎第五高等学校長宛て松浦鎮次郎文部省専門学務局長通知、「大正二年五月高等学校長会議決議書」、「高等学校長会議決議 自明治三十九年至大正三年」(熊本大学五高記念館所蔵)所収。
- 25) 1913年5月8日付『官報』1-2ページ。
- 26) 同上、19ページ。
- 27) 1913年7月22日付『官報』10-11ページ、1913年7月23日付『官報』7-8ページ、1913年7月26日付『官報』10-11ページ、1913年7月28日付『官報』3-4ページ、1913年7月29日付『官報』8-10ページ、1913年8月4日付『官報』4-5ページ。
- 28) 「退職者履歴資料一八、昭和12」所収。
- 29) 1913年5月8日付『官報』18-19ページ。
- 30) 前掲「入学志願者撰抜試験委員会決議録 明治四十四年六月以降 東北帝国大学農科大学教務部」。
- 31) 同上。
- 32) 1913年7月11日付『官報』10-11ページ。
- 33) 大沢正之「札幌農学校と神中」(『札幌同窓会誌』復刊号、1966年12月、31ページ)。
- 34) 「高等学校長会議」(1914年4月29日付『朝日新聞』朝刊4面)、「高等学校長会議」(1914年5月3日付『朝日新聞』朝刊2面)。
- 35) 1914年5月6日付発専93号、吉岡郷甫第五高等学校長宛て松浦鎮次郎文部省専門学務局長通知、前掲「高等学校長会議決議 自明治三十九年至大正三年」所収。
- 36) 「高等学校長会議」(1914年5月1日付『朝日新聞』朝刊4面)。
- 37) 1914年4月30日付『官報』1ページ。
- 38) 1914年5月1日付『官報』3ページ。
- 39) 同上、33ページ。
- 40) 1914年7月21日付『官報』17-18ページ、1914年7月22日付『官報』12-13ページ、1914年7月25日付『官報』9-11ページ、1914年7月27日付『官報』9-10ページ、1914年7月28日付『官報』12-14ページ、1914年7月29日付『官報』13-14ページ。
- 41) 「退職者履歴資料五、1、大正9」所収。
- 42) 1914年5月1日付『官報』32-33ページ。引用中の【 】は割注を示す。以下同じ。
- 43) 前掲「入学志願者撰抜試験委員会決議録 明治四十四年六月以降 東北帝国大学農科大学教務部」。
- 44) 1914年7月7日付『官報』13-14ページ。
- 45) 『東京外国語学校一覽 自明治三十九年 至明治四十年』1906年11月、101ページ。
- 46) 田中勝吉「alma mater 北大農学部の思い出」(『札幌同窓会誌』第2号、1967年12月、48-49ページ)。
- 47) 西佐久一「北大とのかかわり—明治—大正—昭和の八十年—」(『札幌同窓会誌』第6号、1980年12月、1-2ページ)。
- 48) GCR生「書取(国語)と体格の試験」(『中学世界』第18巻第4号、1915年3月、86ページ)。

- 49) 「庶務 学校長会議」『日本帝国文部省第四十三年報 自大正四年四月至大正五年三月』上巻、1917年8月、5ページ。
- 50) 「高等校長会議」(1915年4月13日付『読売新聞』朝刊3面)。
- 51) 1915年5月5日付発専109号、吉岡郷甫第五高等学校長宛て松浦鎮次郎文部省専門学務局長通知、「高等学校長会議決議 自大正四年至大正六年」(熊本大学五高記念館所蔵) 所収。
- 52) 1915年4月16日付『官報』2ページ。
- 53) 1915年4月19日付『官報』15ページ。
- 54) 1915年7月22日付『官報』7-8ページ、1915年7月24日付『官報』14-15ページ、1914年7月26日付『官報』16-17ページ、1915年7月27日付『官報』5-7ページ、1915年7月28日付『官報』6-7ページ、1915年7月29日付『官報』5-6ページ。
- 55) 1915年4月19日付『官報』14-15ページ。
- 56) 1915年7月12日付『官報』13-14ページ。
- 57) 学校案内掛「受験問答」(『中学世界』第18巻第4号、1915年3月、101ページ)。
- 58) 小笠原亀一「在学当時の思出」(『札幌同窓会誌』第2号、1967年12月、56ページ)。
- 59) 村越信夫「あこがれの札幌」(『札幌同窓会誌』第3号、1968年11月、39ページ)。
- 60) 加納瓦全「昔を偲んで」(『札幌同窓会誌』第2号、1967年12月、50-51ページ)。
- 61) 足立仁「古い時代を顧みて」(『札幌同窓会誌』第3号、1968年11月、42ページ)。
- 62) 開催日および出席者は、「高等学校長会議(一日)」(1916年4月29日付『朝日新聞』朝刊4面)による。閉会日は、「高等学校長会議」(1914年4月30日付『朝日新聞』朝刊4面)に「五月五日まで延期することゝなれり」とあり、「高等学校試験科目決定」(1916年5月4日『読売新聞』朝刊2面)で5月3日の記事を確認できるが、正確な閉会日は不明である。

なお、『日本帝国文部省第四十四年報 自大正五年四月至大正六年三月』(上巻、1918年8月、4ページ)では「四月二十七日ヨリ五日間」となっているが、本稿では同時に鑑みて新聞記事を採用した。
- 63) 1916年5月16日付発専97号、吉岡郷甫第五高等学校長宛て松浦鎮次郎文部省専門学務局長通知、前掲「高等学校長会議決議 自大正四年至大正六年」所収。
- 64) 1916年5月5日付『官報』2ページ。
- 65) 同上、16ページ。
- 66) 1916年7月25日付『官報』5-7ページ、1916年7月27日付『官報』8-10ページ、1916年7月28日付『官報』5-6ページ、1916年7月29日付『官報』10-12ページ。
- 67) 1916年5月2日付『官報』22-23ページ。
- 68) 1916年7月11日付『官報』15-16ページ。
- 69) 渡辺又次郎「東北帝国大学農科大学予科の受験に就いて」(『中学世界』第19巻第13号、1916年10月、54-57ページ)。
- 70) 北島敏三「同窓生の思い出」(『札幌同窓会誌』第4号、1970年3月、85ページ)。
- 71) 「高等学校長会議 入学試験制度改正の諮問」(1917年3月6日付『朝日新聞』朝刊2面)、「高等学校長会終了」(1917年3月11日『朝日新聞』朝刊2面)。
- 72) 佐々木享『大学入試制度』科学全書14、大月書店、1984年11月、33ページ。
- 73) 「高等学校長会議 入学試験制度改正の諮問」(1917年3月6日付『朝日新聞』朝刊2面)、「高等学校長会議」(1917年3月7日付『朝日新聞』朝刊4面)、「入学難の解決(試験制度と其諸案)」(1917年3月8日付『朝日新聞』朝刊3面)、「高等学校長会議 志望査定順決定」(1917年3月10日付『朝日新聞』朝刊3面)、「受験者の分配 高等学校集合試験」(1917年3月10日付『朝日新聞』朝刊4面)。
- 74) 「高等校長会議」(1917年4月14日付『朝日新聞』朝刊3面)、「高校長会議終了」(1917年4月18日付『朝日新聞』朝刊3面)。

- 75) 前掲「退職者履歴資料一八、昭和12」所収。
- 76) 「高校長会議終了」(1917年4月18日付『朝日新聞』朝刊3面)。
- 77) 前掲「高等学校長会議決議 自大正四年至大正六年」所収。
- 78) 1916年5月11日付発専134号、吉岡郷甫第五高等学校長宛て松浦鎮次郎文部省専門学務局長通知、前掲「高等学校長会議決議 自大正四年至大正六年」所収。
- 79) 1917年4月27日付『官報』2-3ページ。
- 80) 同上、3ページ。
- 81) 同上、4-5ページ。
- 82) 1917年8月9日付『官報』6-14ページ、1917年9月10日付『官報』10-11ページ。
- 83) 1917年4月24日付『官報』23-24ページ。
- 84) 1917年7月5日付『官報』5ページ。
- 85) 須藤直吉「久闊の札幌行とクラーク訓話の討究」(『札幌同窓会誌』第3号、1968年11月、58ページ)。
- 86) 「大学予科入学願書 大正六年七月」(帝大/2019/0179) 所収。
- 87) 蝦夷の男子「札幌農大奮闘の記」(『中学世界』第20巻第12号、1917年8月、244-246ページ)。体験記の内容は、拙稿「100年前の受験生活」(『北海道大学150年史編集ニュース』第5号、2020年8月、4ページ) に紹介した。
- 88) 前掲『大学入試制度』32ページ。
- 89) 前掲『大学入試制度』33ページ。
- 90) 前掲「東北帝国大学農科大学予科の受験に就いて」(『中学世界』第19巻第13号、1916年10月)。

[後記] 本研究は、JSPS 科研費 JP22K02224の助成を受けたものである。

(ひろせ きみひこ／北海道大学大学文書館員)